

安政元年(1854)閏7月21日～昭和9年(1934)1月28日。江戸の姫路藩中屋敷で生まれたが、曾祖父も祖父も江戸詰の藩主側近であり、幼少より文武両道に励んだ。明治2年(1869)に開成所が創設され直ちに入学、4年に貢進生となり大学南校に学び、8年に最初の文部省留学生としてフランスで諸芸学を修めることとなる。12年にエコール・サントラルを、また13年にパリ大学理学部を卒業して帰国し、内務省土木局に入る。17年から新潟に赴き、信濃川、阿賀川、庄川などの直轄工事を監督する。19年に東京大学工芸学部工科大学校を統合して帝国大学の工科大学が発足するや最初の学長となり、教授としては河海工学を担当することとなり、土木局は兼務となる。21年から22年にかけて山県有朋(内務大臣)の欧州出張に随行する。23年に抜擢されて土木局長となり、土木局が主務となり、工科大学は兼務となる。なお23年には菊池大麓、穂積陳重などとともに最初の貴族院勅選議員となる。27年から土木技監となり、29年から土木局長を兼務する。31年に大隈・板垣内閣が成立するや山県に殉じて土木局を去る。同時に後進に途を開こうとして工科大学教授兼学長をも辞任。31年11月から33年12月まで通償次官となり鉄道国有化に尽力。36年3月に鉄道作業局長官となり、同年11月に京釜鉄道株式会社総長となる。日露戦争に備えて京釜鉄道を速成し、つづいて

39年6月から40年6月まで統管府鉄道管理局長官として朝鮮における鉄道幹線網の基盤を整備する。39年9月に帝国学士院会員となる。大正3年(1914)に土木学会が創立され、最初の会長となる。6年から10年まで理化学研究所長となる。9年に学術研究会議が創設され、最初の会長となる。13年に樞密顧問官となり、貴族院議員などの役職を辞任。昭和4年(1929)に万国工業会長となり、万国工業会議を東京で開催する。

内務大臣の山県有朋から重用され、内務省土木局の体制を整え、人材を育て、明治24年には新旧の交替を完了した(これは原敬による外務省の、また山本権兵衛による海軍の刷新に比肩してよからう)。工科大学長に就任してから病没に至るまで土木のみならず、工業全般の大御所として精励した。工科大学では河海工学の講義をして河川、港湾などの技術者を育成したが、土木局が忙しくなり、高弟の中山秀三郎を後継者として大学に迎えた。中山は大正15年まで講壇に立っただけでなく、古市を助けて東京港湾計画を推進し、明治32年には高弟の直木倫太郎を東京市に入れて計画実現を計った。大正11年に港湾協会が設立されると古市は副会長に推挙された。

【参考文献】

故古市男爵記念事業会：古市公威、1937年

金関義則：古市公威の偉さ(雑誌「みすず」に連載)